

「ラーニングライフ 第7回学生の学修に関する実態調査報告書」の結果に基づく対応計画

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
総合科学部	1	「大学教員と顔見知りになる」、「他の学生と友情を深める」ことができず、人と人のつながりが希薄化している。	(1) 授業中に学生同士で議論したり、授業時間外に他の学生と一緒に勉強や授業内容を話している割合は増加していることから、授業でのつながりを友人関係へ転化できるよう、授業におけるグループ学習では学生同士及び教員とのコミュニケーションを取りやすくなるよう教員に要請する。	本年度後期は対面授業も増加し、学生同士及び教員とのコミュニケーションが取りやすくなるよう務めた。授業以外でのつながりも友人関係へ転化できるよう令和5年度に向けて新入生オリエンテーションを計画している。また、教員と学生の懇談会を開催し、学生とのコミュニケーションをはかった。
	2	授業時間外学修が学年を経るごとに減少する。	(1) 1年生の段階から授業外時間外学修を促す学修指導を行う。	令和5年度新入生オリエンテーションにおいて周知を予定している。また、2～4年生に関しては、コースガイダンスにて学修を促す予定である。
	3	学年を経るごとに、国際教養コースを除く3コースにおいて英語学習の機会が減少する。	(1) 学部において継続的に語学学習を促す学習指導を行う。	令和5年度新入生オリエンテーションにおいて英語学習の習慣を促す指導を計画している。また、2～4年生に関しては、コースガイダンスにて英語学習を促す予定である。
医学部医学科	1	1 医学科全体のアンケート回収率は50.6%（1年生62.8%、3年生37.5%）と例年に比して低い回収率であり、他学科に比較しても平均を下回っていた。	(1) アンケート実施時期の授業においてアンケート回答を促す。	対象学年の授業においてアンケート回答を促した。
		2	オンディマンド授業においても動画コンテンツの中にアンケート実施のアナウンスを加える。	対象学年の授業においてアンケート回答を促した。
	2	1 1年生、3年生ともに予習・復習時間が絶対的に不足している学生が一定数おり、成績不振の一因になっていると推測される。また、3年生になっても、将来の見通しを持っていない、あるいは将来の見通しを持っていても何をすべきかわからないという学生が34%いる。	(1) 1年次のグループ担任によるグループ面談を年2回に増やし、2年次でも実施する、3年次の医学研究実習中間ヒアリングを活用する。4年次メンター制度による面談を5年次以降でも実施する等のメンタリングの充実をはかることで、低学年の段階から学修やキャリア形成指導を行っていく。また、成績の状況を見て学習時間が不足している学生については面談等で早い段階からの個別対応を行う。	基礎系教授によるグループ担任面談を1年次の年1回から、1年次および2年次いずれも年2回に増やし、3年次の医学研究実習中間ヒアリングの年2回実施を継続する計画を進めている。また、4年次メンターによるメンタリングを4年次と5年次に実施する計画を進めている。
		2 卒業後の進路について教職員に対して個別に相談すると回答している学生が67%にとどまっている。一方、クラス担任制度に「とても満足」、「満足」と応えている学生は1年生25%、3年生23%と約1/4にとどまっている。	(2) Student Lab 部会が中心となって、研究医学生への支援を含め医学研究活動の充実を進めていく。医学研究実習では理工学部など受け入れ先の選択肢を増やし、学生の希望に沿った研究が行えるよう環境整備を進める。	Student Lab部会が中心となって、研究医学生への研究活動の支援やキャリアガイダンスを実施している。理工学部や先端酵素学研究所など、選択肢を増やし学生の希望に添った研究が行える環境整備を行った。
	3	1 人間関係を構築する能力が「大きく増えた」「増えた」と回答したのは1年生52%、3年生41%、コミュニケーションの能力が「大きく増えた」「増えた」と回答したのは1年生51%、3年生45%にとどまっており、低学年の間にコミュニケーション能力を涵養するための十分な機会が確保できていないと推測される。	(1) SIH道場における「振り返りワークショップ」や「蔵本地区合同ワークショップ・チーム医療入門」等の充実をはかることで、入学後、早い段階から同僚や他の医療職メンバーと信頼関係を築くことができるような実習の機会を増やしていく。	1年次4月と2年次4月に授業の一環として振り返りのワークを実施しており、さらに2年次3月の医学研究実習プレ配属、3年次12月のPBLチュートリアル導入ワークショップにおいても振り返りのワークを取り入れることを計画している。オンライン手法を駆使して、蔵本地区全体での1年次チーム医療入門ワークショップ、4年次学部連携PBLチュートリアルを実施している。
		2 日常的に自身の学修内容等を振り返り、改善点を見出し、向上を図っているという問いに、「非常にそう思う」「そう思う」と回答したのは1年生49%、3年生48%と半分に満たず、省察が十分に習慣づけられていないと考えられる。	(2) SIH 道場に始まり、年間を通じて省察の機会を何度も設けていく。	1年次4月と2年次4月に授業の一環として振り返りのワークを実施しており、さらに2年次3月の医学研究実習プレ配属、3年次12月のPBLチュートリアル導入ワークショップにおいても振り返りのワークを取り入れることを計画している。
	4	1 英語の学習状況については、聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力のいずれの項目も入学後から調査時までの向上が実感されていない。	(1) 専門英語の医学研究実習や医学英語の拡充とともに、教養から専門、卒業まで一貫した英語教育のカリキュラム整備に取り組む。	4年次の医学英語については、英語学習のモチベーションを向上させるために、医学・医療のグローバル化を学ぶことができる内容へさらに充実させた令和5年度シラバスを作成している。
2 1年生、3年生ともに教養教育、専門教育で行われる英語教育において、現状では不十分と思っている学生が約6割おり、ネイティブスピーカーの教員による授業を増やしてほしい、専門英語の時間を増やしてほしい、専門英語のライティング、会話に重点を置いた授業を増やしてほしいといった希望を持つ学生も多い。		(2) 医学英語を含めグローバル化教育を中心的に担当する教職員体制の充実をはかる。	令和5年度から利用開始予定の医歯薬学共創センター（仮称）の国際交流スペースの活用・管理体制と関連付けて、全学ならびに蔵本地区全体のグローバル化教育充実の観点で協議を開始した。	

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
医学部医科栄養学科	1	英語の学習状況について、2021年第6回の結果では、1) 1年次に比較し3年次では自己評価が大きく低下、2) 専門課程での英語の授業を増やしてほしいとする者が多いという結果であったが、2022年第7回の結果においては改善されていた。	(1) 令和2年度入学生より専門課程での「栄養英語」を必修化しており、効果が認められたと思われる。引き続き今後の推移を見る。	「栄養英語」は2年次での開講となるので、令和2年度入学生は令和3年度に全員受講した。授業評価アンケートの結果等を勘案すると、約9割の学生が「栄養英語」の授業内容に満足し、今後の役に立つと感じると回答した。また「研究や大学院進学を見据えた英語学習の必要性について考える機会になった」等肯定的な感想が多かった。今後も本取り組みを継続していく。
	2	2021年 第6回と同様にカリキュラムマップやナンバリングについて「知っており、見たことがある」の割合が極めて低い。	(1) 1年次より3年次で低下していることから、1～3年次の4月のオリエンテーション時にカリキュラムマップとナンバリングについてよりわかりやすく説明する。特に1年次においては、新入生オリエンテーション時の説明に加え後期の授業開始時期などにも説明する必要があると思われる。	令和5年4月に実施予定の1～3年次のオリエンテーションにおいてカリキュラムマップとナンバリングについても説明する予定とした。
医学部保健学科	1	「将来の見通しを持ち、何をすべきかわかっている」と答えた1年次学生は7割で、全学の約5割と比べて割合が高い特徴を持つ。最近数年間の調査結果と同様である。	(1) 幅広い学修の促進を目的として、専門性を志向した学修方法を冊子「学修の手引」やSIH道場の教育プログラム等を通して入学時に提示し、将来像をイメージした「学修設計」の立案を指導している。学修計画に沿った学修ができるよう指導と支援を行っており、取り組みの浸透結果が継続的に現れている。引き続き、取り組みを推進する。	冊子「学修の手引」を最新の内容に改定する作業を年度末に実施し、継続して、幅広い学修の促進に係る取り組みを推進する。
	2	3年次の調査結果において、授業時間外の学修（授業課題や準備学習・復習）にかかる時間が前回調査と比べて増加はしているが大学生としての必要な学習時間の確保は不十分である。一方で、現在の自分の学修時間や学修態度に満足していない3年次学生が4割程度あり、過去2年の調査より大幅に増加している特徴がある。	(1) 学修意欲を高める適切な指導により自発的な学修が可能であると読み取れる。毎回の授業の予習・復習や自学自習の指示などをシラバスに明示して初回の授業などで説明し、予習に基づく学修や将来像をイメージした主体的な学びへの動機付けを高める学修などの指導を継続的に実施する。	毎回の授業の予習・復習や自学自習の具体的な指示などをシラバスに記載し、翌年度の初回の授業で授業時間外の学修についてシラバスを用いて説明することを授業担当教員に伝え、確実な実施を促した。
	3	SIH道場で学んだ内容のうち、在学中の学修に役立っている項目は、看護学専攻では「他者と協働して学修や活動に取り組むこと」、放射線技術科学専攻では「専門分野の体験学習」、検査技術科学専攻では「文章の書き方」が最も多く役立ったと回答している。	(1) 期待通りの項目が挙げられている。SIH道場で実施している取り組みについては3年次だけではなく卒業時や卒業後調査を通じた効果の検証も必要であろう。	今年度及び昨年度の卒業予定学生を対象としたアンケートの集計結果を教育プログラム評価委員会で検討して改善に活用することとした。
	4	英語の学修では、大学で実施している英語教育で十分であると考えている学生が多い傾向にあるが、検査技術科学専攻では、前回調査と同様、専門英語の時間を増やしてほしいとの意見がある。	(1) 語学マイレージ・プログラムの学習効果が現れていると考えられるが、引き続き、英語学習方法の周知や英語学習の習慣付けを促す対応を実施する。教育プログラム評価委員会で学生の意見を聴き、専門英語等の授業内容に反映させる。	各学年の新年度オリエンテーションにおいて、英語学習方法や学習相談体制の周知を行う計画である。検査技術科学専攻における専門英語の時間数について教育プログラム評価委員会で学生と意見交換し、必修2単位の科目「専門外国語」で臨床検査技術等に関する専門英語を外国人教員を含む担当教員により実施しており、教育目標の達成によって専門英語の高い習熟が得られることを確認した。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
歯学部	1	今年度は、口腔保健学科では、1年生と3年生ともに100%の回答率であった。さらに、歯学科3年生も92.9%と高い回答率であった。しかしながら、歯学科1年生の回答率は68.4%であった。昨年度と同様に本年度も、新型コロナウイルス感染症の流行の影響により、対面講義・実習の制限や課外活動の停止など、学生とのコミュニケーションが取りづらい状況であったが、本年度はアンケートの回答率をあげるために、学生にコミュニケーションをとるように努力したため、昨年度より回答率が大幅に上昇した。	(1) 今後は、歯学科1年次の回答率を上げることが課題である。特に歯学科では、1年次の学生と対面で話をする機会が少なく、この辺が十分に回答に導けなかった一つ原因と考えられる。担任制度などを活用し、歯学科1年生とも十分にコミュニケーションをとる機会を増やす。	1年生には、オリエンテーションや講義において、アンケートの回答を複数回お願いした。次年度は、担任制度が充実することから、コミュニケーションをとる機会が増えることが期待される。
		(2) 口腔保健学科3年生ではアンケートの設問の多さからか、設問の途中から半数以上の学生が無回答であり、前年との比較などの分析が不可能である。次年度以降は、アンケートの回答法についても学生に指導する必要がある。	アンケートの回答法に関して、講義時間等でお願した。	
	2	英語能力に関しては、聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力のいずれにおいても、ある一定の力（設問でB1以上：留学などが困難でない程度かと考えるレベル）を有する学生の割合は、全学平均よりやや多いが、これが入学後、3年次と顕著に変化する傾向はない。5つの力のうち会話力に低い傾向がある。但し、3年次の専門課程になっても「74.どのように、英語の勉強を行っていますか」に対して、「毎日または定期的にテレビ、ラジオの英語教育番組を利用して勉強している：歯学科12%・口腔保健学科17%」を筆頭に学習している学生がいることは心強い。一方、75.の設問にある渡航経験では「1年次：歯学科50%・口腔保健学科82%、3年次：歯学科62%・口腔保健学科40%（60%が無回答）」と、ほとんどの学生が経験がなく、これは語学能力と密接に関連している。そのためか、「76.徳島大学における英語教育についてどう思いますか」の答えに、「教養教育、専門教育で行われる英語教育で十分である：1年次：歯学科24%・口腔保健学科57%、3年次：歯学科54%・口腔保健学科33%（60%が無回答）」が筆頭になっている。これは後述のアンケート項目である卒後の進路ともリンクしているものと考えられる。	(1) このような状況に対しては、卒後に大学院進学から海外への進出などの歯学部教員の事例を示すことや留学生との交流、外国人研究者の講演や招聘など、留学や海外赴任などキャリアパスの多様さを提示するとともに、外国人との交流機会も必要と考える。	今年度末（3月下旬）あるいは次年度初旬（4月上旬）に、大学院進学を見据えた就職セミナーを外部および内部講師を招いて実施する準備をしている。しかしながら、今年度はコロナ禍の影響もあり、卒後に大学院進学から海外への進出などの歯学部教員の事例を示すことや、外国人研究者の講演や招聘など、留学や海外赴任などキャリアパスの多様さを提示する企画はできなかった。次年度に本企画を開催するとともに、協定校との交換プログラムが再開される予定である。
		(2) 歯学部は、歯学英語や外国人留学生を支援する国際口腔健康推進学分野があり、外国人教員が在籍しているため、学生の外国人留学生との交流を通じて外国の言語・文化・風習（慣習）・医療体制などを学ぶ機会をさらに増やす。	本年度は、2022年12月5日にオンラインで、「The Niken Memorial Scholarship Program」を開催し、4名の学生が英語でプレゼンテーションを行なった。このうち1名が優秀発表賞を受賞した。このプレゼンテーションの準備として、国際口腔健康推進学分野による指導を行なった。次年度は協定校との交換プログラムが再開される予定で、さらなる交流による外国の言語・文化・風習（慣習）・医療体制などを学ぶ機会が増えることが期待される。	
3	本学の教育内容・環境への満足度において、「89.1年次SIH道場」〔1年次：歯学科50%・口腔保健学科88%、3年次：歯学科52%・口腔保健学科33%（60%が無回答）〕「90.初年次生を対象とした教育プログラム内容」〔1年次：歯学科53%・口腔保健学科47%、3年次：歯学科51%・口腔保健学科20%（60%が無回答）〕の満足度も同様な傾向である。「91.授業の全体的な質」〔1年次：歯学科50%・口腔保健学科89%、3年次：歯学科61%・口腔保健学科33%（60%が無回答）〕、「95.学習支援や個別の学習指導」〔1年次：歯学科24%・口腔保健学科27%、3年次：歯学科33%・口腔保健学科42%〕となっており、いずれも満足度において、どちらでもないという回答が多く、不満がある学生は少ない。	(1) 今後は、この満足度を向上させる工夫も必要と考える。SIH道場に関しては、「103.「SIH道場」で学んだ内容のうち、役に立っている項目」では、「専門分野の体験学習」が目立っている。1年次のSIH道場のプログラムのさらなる充実を図りたい。	今年度は前年度に実施されたSIH道場の一部のカリキュラムを変更し、実施した。具体的には、カリキュラムに早期体験実習・早期臨床実習を組み込み、研究室体験を基礎系分野と臨床系分野の両方を体験できるものにした。	
		(2) アクティブラーニングやグループワークの実施など、効果的かつ学生が満足できる教育システムを構築していきたい。さらに、担任制度やチューター制度を活用した学習支援や個別の学習指導体制も整備していきたい。	今年度は、次年度に向けて担任制度の充実を図るため、下記のように変更した。 1. 歯学科担任団の構成 正担任：教授2名（基礎1名、臨床1名） 副担任：助教・講師・准教授2名～4名（基礎1名以上、臨床1名以上） ・正担任が男性（女性）2名の場合、副担任には女性（男性）を1名以上 ・正担任が男女各1名の場合、副担任は男女を問わない。 2. 担任団の要件（原則） ・若手・中堅・ベテランのバランスに配慮する。 ・6年間担当できるよう配慮する。 3. 担任団の役割 ・修学や大学生活等の相談に対し指導・助言することにより、学生の大学生活を支援する。 ・担任学年の学生指導に必要な情報を共有する。 ・担任団のうち1名は学生委員会委員となり、各学年共通の情報を共有する。	
4	GPAを確認している学生が少ない	(1) オリエンテーション等でのGPAの認識とより良いGPAを獲得する動機づけを行う。	GPAに関しては、全学年にオリエンテーションで周知した。今後は、奨学金の申請やさまざまなプログラムの申請等、さらには就職においても必要とされることがあることを周知し、その重要性を伝えるようにする。	

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
薬学部	1	1年生・3年生ともに、自身の「GPA」を確認している学生の比率が高かった。両学年において、90%以上の学生が確認している。さらに、「徳島大学では、履修者が11名以上の授業では、自分の成績や成績の分布が確認できるようになっていること」を知っており、その情報を確認し、役立てている学生も、1年生・3年生ともに80%程度となっている。	(1) コロナ禍の状況において、1年生へは、クラス担任による面談を毎月行い、試験などの成績を手渡しつつ、指導を行っていることが功を奏しているものと考えられる。また、3年生へは、配属先研究室の指導教員が、研究室での日々の活動を通じて細やかな指導を行っている。こうした指導教員による綿密な面談・指導を今後も継続する。	1年生へは、クラス担任による面談を毎月行い、試験などの成績を手渡しつつ、きめの細かい指導を継続して行っている。また、3年生へは、配属先研究室の指導教員が、研究室での日々の活動を通じて細やかな指導を継続して行っている。こうした指導教員による綿密な面談・指導を継続している。
	2	1年生・3年生ともに、大半の学生が、大学教員と顔見知りになることが、とてもうまくいった・いくらかうまくいったと回答している。さらに、他の学生と友情を深めるという点においても、同様に良好な状態となっている。実際、「人間関係を構築する能力」「他の人と協力して物事を遂行する能力」「コミュニケーションの能力」が、大きく増えた・増えたと回答している学生が、1年生・3年生ともに、60%程度にまで至っており、さらに、「授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりした」学生も、両学年において、80%を超えている。	(1) クラス担任による面談や、体験系の講義・演習等を通じて、教員と学生、あるいは、学生同士の距離感が近く、かつ、協力して作業等に取り組む機会が多かったことが、結果として現れているものと考えられる。授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりする機会にもつながっていると考えられ、今後も、現在の環境を継続しつつ、良好な関係を築いていく。	コロナ禍の状況ではあるが、1年生については、クラス担任による面談や、対面での体験系の講義・演習等が増えてきており、さらに教員と学生、あるいは、学生同士の交流を活性化することができており、さらに良い方向に進んでいる。対面での講義が増えたことで、授業時間外にも他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりする機会にもつながっている。
	3	1年生・3年生ともに、学修のために図書館や関連するサービスを利用する割合が低い傾向にあった。両学年において、85%以上の学生が、学生自身で文献や資料を調べることがあると回答しているにも関わらず、多くの学生が、授業課題のために図書館の資料を利用したことがない状態となっている。さらに、レポートや宿題で、調べものをするときの情報源として、図書館の書籍・文献（電子版を含む）を挙げているのは、1年生で10%弱、3年生で30%弱となっており、両学年において、70%以上の学生は、図書館の学修支援サービスを利用していない。一方、授業課題のためにWeb上の情報を利用した学生は、両学年ともに、90%を超えている。	(1) コロナ禍で大学への入構が制限され、オンラインで講義やレポートの提出等を行うことが多かったことや、スマホ・タブレット等でインターネットを閲覧することが多い世代であることが原因として考えられる。さらに、薬学という学問が、常に最先端の情報を必要とする医療系の学問であり、かつ、多くの学生が、最先端の情報はインターネット上にあると考えていることも、原因の一つとして挙げられるだろう。しかし、図書館において精査された蔵書等から得られる情報や、図書館を利用することによるリサーチスキルの向上等も、学生の将来にとって重要である。今後は、図書館の有用性や、図書館を利用することの意味等を、講義等を通じて教員から説明し、図書館の活用を呼び掛けるなど、啓蒙を行っていく。	コロナ禍での制限が緩和され、対面での講義が実施されるようになり、大学へ来る機会が増えた。それに伴い、図書館を含む大学施設を利用した自主学習の機会も増えてきている。図書館の有用性や、図書館を利用することの意味等を、講義等を通じて教員から説明し、図書館の活用を呼び掛けており、改善が期待される。
理工学部	1	理工学部ではアドバイザー制度や担任制度により学生の学修をサポートする取り組みを行っている。1年生に比べ3年生の方が相談等増えているものの、学生は必ずしも教員を身近に感じてはいないようである（設問32, 33, 37, 82, 94, 114）	(1) アドバイザー制や担任による学生面談を着実に実施し、一層コミュニケーションを深められるように努力する。なお、アドバイザー制ではコースの実情に合わせた形で、担当する学生のケアを第一に考えて実施しており、各学年でのセメスター始めにおける履修相談や、生活面での相談など、学修と生活の双方における学生のケアに今後も努めていく。履修相談室やキャリア支援室の利用が少ない状況にある（設問30, 32）ので、オリエンテーションやアドバイザー面談等で周知に努める。以上を踏まえ、引き続き、担任制、アドバイザー制度を並行して実施する。	コースによって若干の差はあるが、基本的に各セメスターの開始と終了の時期を目途にアドバイザー教員による個別面談を実施している。面談においては単位の履修状況の確認や履修指導だけでなく生活面、さらには心のケアを念頭に実施しており、面談内容は教務システムを利用してWeb上で記録として残している。新入生オリエンテーションではアドバイザー制度について周知させ、数年間同一アドバイザーが担当すること、何か問題が生じた場合は迅速にアドバイザーに連絡するようにしている。
	2	昨年度はコロナ禍のため、多くの授業がオンラインになっていた。e-learningに関する調査（設問122-124(1年生)・設問125-127(3年生)）において、「本学のe-learningサービスが学修に役立つか」という問いにはおよそ半数が肯定的な意見であった。また、増やすかとの問いに関しても前回より賛成の意見の割合が増加しており、その傾向は3年生の方が顕著である。今後もオンライン授業は増えると考えられるので、オンライン授業の実施方法を工夫し、より肯定的な評価になるように改善する必要があると考える。	(1) インターネットを使った授業課題の提出が多くなるとの回答が両学年とも多く（設問22）、オンライン授業が多く実施されていることを裏付けるものであるが、インターネットをレポートなどの情報源としても活用している状況が確認できる（設問65）。また、授業内容の理解の促進につながる方法として課題演習が挙げられている（設問19）。現在、本学では電子教科書の導入や次期LMSへの移行など、教育環境のDX化が進められており、今後、これらを活用した有効的なオンライン学習法について検討する。	オンライン授業に関するアンケート調査について、教員内で共有し、授業改善に取り組んでいる。コロナ禍においても講義室の席数に制限を設けるなどの感染防止対策を行った上で対面授業を実施した。今後、対面に戻りつつあるとともに、電子教科書の普及も進むであろうことから、講義スタイルの変更が予想されるので、教務委員会を中心に運用方法などを議論していく予定である。
	3	学生には、大学で専門性を高めるとともに、視野を広げ、社会における多様な問題を解決する能力を養ってもらいたいと考えている。専門的な知識の向上に対する満足度は高く（設問44）評価できるが、昨年と同様に他分野の知識や交流が必ずしも十分ではないように見受けられる（設問46, 50, 51, 52, 60）	(1) 理工学部では1年次の分野横断型の導入科目としてSTEM概論を準備しているとともに、他コースの専門科目の履修を2単位以上取得することを義務付けており、他分野の知識の獲得を促している。アンケート結果では地域社会や国民が直面する問題への対処能力（設問51, 52）において昨年度比で大きな変化がなく、俯瞰的に解決する能力の涵養が十分ではないことを示している。しかしながら、SIH道場に対する評価は、1年生より3年生の評価の方が高くなっている。従って、幅広い知識と汎用的スキルの重要性は3年生には認識されており、これを1年生の時点でどれだけ学生にその重要性を植え付けるか改善したいと考えている。加えて、既存科目の内容を見直すなどして、少しでも学生の視野を広げられるように検討していきたい。	引き続き、分野を超えた知識や交流が促せるように、STEM概論や他コース履修を適切に実施していく。SIH道場に対する評価は、1年生より3年生の評価の方が高くなっていることより、幅広い知識と汎用性スキルの重要性を1年次から認識するように各コース担当者によるオムニバス形式の理工学概論等の科目を通して、分野横断的な知識の涵養に努めていく。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
生物資源産業学部	1	授業への欠席や遅刻は少なく(問26, 27), 授業を受けることに真摯であることが伺えた。また, 専門的教育では3年生の8割が専門的知識の重要性を自覚し(問63, 104), 卒業研究の研究室選択に研究内容を挙げ(問122), 専門的知識や技術の習得をしたいと考えており, 学問・研究への興味や知的好奇心があること(問123)をみると, 学生は生物資源利用に関する意識が高く, 目的をもって学修していることが伺える。	(1) コロナ渦で授業を受けにくい状況であるため, 学生にも苦勞を強いていると痛感している。今後, 対面での講義に戻し, 対面による授業の新しい体制を作る責務がある。今後の授業のあり方を模索し, より良い学修環境を作るよう努力し, さらに研究に対する導入についても工夫を重ねていけるように研鑽を積む。	令和4年後期の授業については, 対面授業が可能な講義の約7割が対面に戻しており, 実習も対面で実施している。さらに, 生物資源利用の研究や産業化についての講義も多く取り入れ, 研究への導入も体制を構築しつつある。ただ, 受講人数が多い学科共通科目は講義室の収容人数の関係で, 未だに遠隔をせざるを得ない状況である。
	2	授業課題のために図書館の資料を利用する率がかなり低く(問20), 一方でWeb上の情報を利用する率がかなり高い(問21)。さらにレポートや宿題で, 調べものをするときの情報源としてインターネットが教科書と同様に挙げられている(問65)。	(1) コロナの影響で図書館を利用しにくい状況が続いていたため, 学生も図書館の利用をしなくなった可能性もある。また, 課題提出が多く, 課題を果たすことを優先し, インターネットの利用が多くなったことも理解できる。しかし, インターネットの情報については様々な問題もある。学生には, 教科書を含め書物を読むことの必要性, 正しい情報の利用方法等を改めて教育していく。	レポートの書き方, 本やインターネットの情報の正しい利用方法などを講義や実習で取り入れている。図書館の利用も可能となったため, 図書館利用も促している。
	3	授業時間外に他の学生と勉強したり, 授業内容を話す機会が多いわけではなく(問24), 他の学生と話す機会や一体感についても, 「とても満足」の回答率も低い(問96, 97)。これは, 他の人と協力して物事を遂行する能力を「大きく増えた」の回答率が10%と低いことにもつながっていると思われる(問49)。また, 教職員に学習に関する相談をしたり, 学内の学習支援室を利用したりしたものもあまりいない(問30)状態である。	(1) 学生同士の交流が少ないと感じている。授業等で顔を合わせる機会が少ないため, 話す機会が少ないことも一因であろう。情報交換もあまり盛んではなくなっており, 授業の取り方なども儼然しない学生, 孤立しがちな学生も出てきている。そこで講義や実習の機会を利用して, 学生間, 学生と教員間で交流しやすい環境を作るよう工夫していく。	講義・実習も対面に戻ってきているため, 学生間の会話は確実に増加してきている。学生と教員との交流もイベントを設けることで増えつつある。問題を抱えた学生や単位修得が儼然しない学生に対しては, 担任教員や学務, 学生委員会が個別対応し, 面談等で学生の状況を聴き, 解決・改善を行っている。
教養教育院	1	教養教育への学生の満足度について 「大学の教育内容・環境に対する満足度(問88)」では, 教養教育に対する回答として, 「とても満足」、「満足」と答えた割合の合計が, 1年生で59%, 3年生で57%だった(前回はそれぞれ53%, 52%。前々回はそれぞれ49%, 50%)。今年度も昨年度に引き続き, 新型コロナウイルス感染症対策で教養教育の授業の多くがオンラインで行われたが, 学生の満足度はここ3年間上昇している。特に昨年から今年にかけて満足度が5%以上上昇している。今後も学生が意義を感じることができる授業を展開していくことが重要である。	(1) 令和3年度から, 教養教育科目は8科目群から4科目群に再編され, 各学部の履修要件もそれに応じて改正された。新しい科目群・科目での学生の満足度をアンケート等で調査し, 満足度の高い授業の実施を目指す。	最新版のアンケート結果では, 教養教育の授業に対して「満足」と回答した学生は, 1年生で63%, 3年生で57%と, 昨年度と比較して, 特に1年生の回答で上昇した。これは新型コロナウイルス感染症対策として行われているオンライン授業に, 教員・学生の双方が慣れてきたこと, また学内のWi-Fi環境や自習室が整ってきたことが考えられる。さらに対面授業においても, 新型コロナウイルスの予防対策の徹底を呼びかけてきたことも満足度の上昇の要因として考えられる。今後は, さらに各学部のDPに合った教養教育の授業を提供する必要がある。
		(2) 令和2年度から, 新型コロナウイルス感染症対策として教養教育科目ではオンライン授業が広く行われるようになった。その経験から学生・教員の双方がオンライン授業に習熟し, オンライン授業の利点・欠点が明らかになってきた。学生の満足度が上がっているのは, オンライン授業に対する習熟度が上がってきたことも一因であると考えられる。今後はコロナの有無にかかわらず, より効果的なオンライン授業の実施を目指す。	前期・後期の授業開始前に, 円滑なオンライン授業の実施のための連絡事項等を授業担当教員に周知し, 効果的なオンライン授業の実施に努めた。学期末の授業評価アンケートでもオンライン授業に対する設問を設け, 学生からの意見を授業担当教員にフィードバックできるようにした。また, 徳島大学のBCPレベルの変更に伴い, 授業実施方法の案内を学生・授業担当教員の双方に行った。	

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
教養教育院	2	<p>教養教育科目の授業選択について</p> <p>授業の選択基準について、「好きな科目や面白そうな科目」は全体的に多いが、「単位をとりやすい授業」も多く多くの学生が選択している。1年生では医・歯・薬学部の一部で、3年生では全体的にこの傾向が顕著である。</p> <p>授業選択の際に重視した情報源について、「履修の手引きやシラバスに記載された情報」が主であるが、「先輩からの助言や情報」や「友人からの助言や情報」の割合も高く、特に3年生では「履修の手引き」より多い場合もみられる。これは「単位を取りやすい授業」の情報を得ようとする学生が多いためと推測される。1年生の場合は情報源となる先輩や友人と知り合う機会が限られることに加え、今年度も新型コロナウイルス感染対策のため遠隔授業が多いことも回答結果に影響している可能性がある。</p>	(1) <p>成績のクラス間格差は受講者の不利益につながると考え、クラス間格差の実態調査と是正することを目的に学期末で授業題目ごとのGPC一覧を検討し、クラス間格差が生じている授業題目担当教員や、授業を受講する学生が所属する学部と、教養教育専門委員会、教養教育実務者連絡会を通じて問題点の抽出、共有、検討を行う。</p>	同一学科・コースの定員に基づき、基礎科目や語学の授業は、同一講時で複数クラスを開講している。令和4年度における複数クラスは大凡、基礎科目で16組、英語で60組、初修外国語で16組の開講があり、これらのクラス間でGPCを比較すると、差が生じているケースが散見された。これら基礎科目及び語学の授業において、同一学科・コースで開講している授業の担当教員2~3名に参加を依頼し、情報共有をする場としてのFDの開催を予定している。常勤教員間での情報共有はもちろんのこと、非常勤教員にとっても教員間で情報共有できる場として有益であると思われる。このようなFDを今後も積極的に開催していく予定としている。
		<p>適切な授業選択のための授業に関する情報を学生へ提示する方法であるシラバスについて、シラバスのチェックを毎年行っている。ここでは必要事項の記載漏れのほか、再試験の有無、成績評価方法、反転授業実施の有無など、学生が授業の全体像をよりイメージしやすいように記載するように授業担当教員に依頼している。この2年間は新型コロナウイルス感染症対策等のため授業形態、評価方法の変更があった場合は、速やかにシラバスの変更と学生への周知を教務システムやmanabaなどを通じて行うようにしている。遠隔授業を一部または全てに取り入れる場合は、実施方法について可能な限り詳細な情報を提供する。</p>	(2) <p>学生の適正な授業選択のため、各授業のシラバスの記載内容や記入漏れのチェックを教養教育院の教員が分担して行った。また、新型コロナウイルス感染症対策等のため、授業形態、評価方法の変更があった場合は、速やかにシラバスの変更と学生への周知をmanabaや教務システムなどから行うよう、教員への周知を行った。</p>	
	3	<p>リメディアル教育について</p> <p>「高校で未履修の数学、物理、化学、生物について大学入学後にどのように勉強したか（問68）」という質問に対し、最も多かったのは「支障を感じないので何もしていない」で、50%、49%（1年、3年）だった。次いで多かったのが「高校の教科書、参考書を使い、勉強した」で29%、27%、「リメディアル授業等を履修した」は17%、16%だった。学生自身の努力、あるいはリメディアル授業を利用することにより何らかの対応をしていることがわかる反面、「必要性を感じたが、何もしなかった」という学生もそれぞれ9%、8%（昨年度は10%、9%）存在した。</p>	(1) <p>教養教育では、高校で数学や理科の科目で未履修、あるいは大学での学修に不安のある学生のために、リメディアルとしての高大接続科目（数学、物理学、化学、生物学）を基礎科目群にて開講している。FD「高大接続情報交換会」を通じて、実施の検証・改善を図る。</p>	12月1日にFD「高大接続情報交換会」を開催した。従来の数学、物理、化学、生物、レポートの書き方講座に加え、今年度から開講された英語についての実施の検証がなされ、改善が提案された。これまでのFDにおいては、当日の参加者のみでの実施であったが、今年度より、FDでの報告部分については教養教育院のHPIにて学内に公開することとし、当日参加者以外の人にもその内容を把握できるようにした。
		<p>教養教育では、入学直後に「高校復習テスト（数学、物理、化学、生物）」を希望する学科に対し提供しており、その採点結果を翌日には学部へ伝えることで、学部による学生への高大接続科目の履修指導につなげている。FD「高大接続情報交換会」を通じて、実施の検証・改善を図る。</p>	(2) <p>FD「高大接続情報交換会」において、高校復習テストの結果をテストを実施した翌日に当該学科に伝えることによって、学科から学生へ適切に履修指導がなされていることが、高大接続科目の受講状況により確認された。</p>	
4	<p>語学教育について</p> <p>教養教育と専門教育における英語の授業だけでは語学学習には不十分であり、自学自習は必要不可欠である。しかし、1年生・3年生とも教養教育、専門教育で行われる英語教育で十分という回答が約半数を占めている（問76）。</p> <p>学習方法（問74）については、1年生では「TOEICなどの参考書・問題集を定期的に勉強」と「授業で使用している教科書・英語論文」の2項目が比較的多い傾向にあるが、3年生はこれらの割合が学部学科によって多少異なっている。常三島地区の学部でTOEICなどの学習をしている割合が増加している傾向にあることから、マイルージポイントの卒業要件や大学院入試対策への意識が学習方法に反映されているようである。蔵本地区ではさまざまな学習方法が選択されており、その中で「教科書や論文」の割合が比較的多いことから、専門教育における語学学習に重点が移っている様子がわかる。これはTOEIC、TOEFLの受験率が3年生で低下する傾向と対応しているようである。高学年まで継続的に自学自習を促進するための方策が必要である。</p>	(1) <p>語学教育センターが実施する語学マイルージプログラム（語学教育センター英語プログラム）の一つとして令和3年度に新設した18時以降あるいは週末・長期休暇における集中プログラムは語学学習意欲を高めるために有効であると考えられるため、開設を拡充する。また、TOEIC・TOEFL対応プログラムとして、初級または中級など学生のレベルに応じたプログラムを複数新設する。</p>	語学教育センターが実施する英語プログラムの利用を増やすため、令和4年度は前期18時以降に2講座、夏季休暇における集中プログラムとして7講座、後期18時以降に4講座、冬季休暇における集中プログラムとして6講座を開講した。これらのうち、前期18時以降の1講座と夏季休暇における集中プログラム5講座、後期18時以降の講座全てと冬季集中プログラムの2講座はTOEIC・TOEFL対応プログラムとし、初級・中級などのレベルと点数の目安を示した。英語に苦手意識を持つ学生にとっても、高いレベルを目指す学生にとっても、コースを選びやすく、それぞれのニーズにも応えるものとなった。	
		<p>TOEIC/TOEFLの受験率や専門分野の語学学習に対する意欲が学部学科によって異なることから、各学部等の語学教育方針を確認し、専門教育と連携した語学マイルージプログラムを検討する。</p>	(2) <p>教養教育専門委員会において、各学部の語学教育方針を確認し、専門教育と連携した語学マイルージプログラムとして効果的に実施するための議論を行なった。</p>	